

2 現代学生と私語

私語についての見解は、教師と学生では大きく違っている。教師たちは近頃めっきり多くなった学生の私語に困惑している。大学の大衆化で、目的意識や勉学態度の身についていない学生、テレビの影響で15分くらいしかじっとしていられない学生、そして若い頃から仲間と群れることしか興味を示さない学生が大量に大学に入学し、大学教授の権威も学問も価値も理解せず神聖な講義を私語で妨害している、と感じている。

学生は私語についてどう考えているのであろうか。学生の言い分を聞くことから始めよう(対象は上智大学文学部2、3年生、64名)。

1. 学生の私語観

(1)私語のストレス解消、コミュニケーション能力

「私語はあった方がよい。学生が欲求不満を解消する時」「私語はお互いに知り合うために必要なコミュニケーション」「一人暮らしだとけっこう淋しくて、友だちと話をしないとストレスがたまってしまう」「私語は授業中の友人とのコミュニケーションであり、いろいろな情報を得ることができる」「私語のある授業は、より教師が身近な存在で、私語を許す自由な雰囲気のあるものだともいえる」「授業には息抜きが必要で、息抜きをすることによって集中力も増すのではないかと思う」「しゃべると、眠けがさめたり、頭がシャキッとす」

学生たちは、私語がストレス解消になり、授業にも集中できるという意味づけをしている。

(2)マルチ人間

「私語をしない人は、内職をしているか、眠っている生徒が多く、講義を最初から最後まで聞いているものは少ない」「皆同じ方向を向いて座って同じことを聞いているふりをしながら、皆ほとんど違うことを考えたり、しゃべったりしている」「私語をするからといっても、本当に大切なことは要領よくちゃんとこなしている」「私語をしても、一応授業は聞いているし、大事だと思うことは、しっかり聞くので、私はそれほど問題にするほどでもないと思う」

テレビ世代の今の若者はながら行動に熟達している。

(3)禁じられているから楽しい

「いけないとわかっている、皆がしてしまうのが私語」「授業中のひそやかな楽しみの私語があっても悪くない」「授業中に話す時は、なぜか休み時間より楽しい。禁じられているからこそ面白さが増すようなところがある」「私語の醍醐味は、いけないことをしていると思ひながら、ひそひそしゃべることを楽しむこと」

私語は「〜からの自由」(離脱)という遊びの精神で充ちている。

(4)授業しか私語をする場所がない

「休み時間には、次の教室に移動しなくてはならないから、友達とゆっくり話し合うこともできない」「放課後は、皆バイトなどで忙しく、すぐ帰ってしまうので、しゃべる機会もないので授業中にしゃべる」「基本的に私は私語が好きだ。友達とのコミュニケーションだから。特に大学では放課後の活動はバラバラなので授業にしか会えない貴重な時間だ」

忙しい大学生は、授業の場を出会いの場、コミュニケーションの場にいる。

(5) 私語の内容

昨日のテレビのこと、昨日の出来事、自分の気掛かりなこと、映画、音楽、占い、本、雑誌、スキー、競馬、食物、バーゲン、コンパ、友達、クラブ、周りの人の服装、将来のこと、教授の言ったことに対する反応、先生の言ったことと思っ出したこと、レポート、試験、ゼミ、先生の悪口、批判。

話題は授業に関係のあること、あらゆる分野にわたっている。

(6) 私語をする時

「授業でわからない時」「授業に興味がない時」「出席重視なので出なければならぬ時」「聞いても聞かなくてもいい授業の時」「先生の声が小さい時」「全然注意しない先生の時」「気分が明るい時」「気持ちがハイになっている時」「何かふと思いついた時」「昨日大事件のあった時」「面白い話題のある時」「その時話さないと中身が死んでしまう話題のある時」「仲のよい友達と座っている時」「周りがざわわっている時」

授業に興味がない時、そして授業にかかわりなく、学生のその時の気分次第で、私語をする。

(7) 私語のない授業

「一言もしゃべらせない先生もいるが、とても苦しい。制約されたからといって、授業に身が入るわけではない」「内容が面白くないのに出席だけはとって、私語をめっちゃ嫌う教授は、実に軽視されています」「私語のない授業だからといって、いい授業とはいえない」「授業をきちんと理解することが大事なので、たとえば私語がなくともみんな居眠りしていったら、授業の意味がない」「私語はやめても、ジェスチャー会話や筆談は決してやめられない」

私語のない授業も、教師が考えるほど教育効果はあがっていないのかもしれない。

(8) 教師への訴え

「中には本当に聞いていていていくつしてしまったり、興味を持ってない講義もあります」「私語は、教師に対する生徒の間接的な訴えである。いわば生徒の民主化要求の声といたところだろうか。私語の多い授業はやはり何か教師の側に問題があると思う」

(9) 構造的課題

「人は常に人と会話をしている。先生との対話なしに一方的に講義をきくのは異常な状態で大変な苦痛である」「多数の人間に対してひとりの人間がしゃべることから一方通行にならざるを得ない。人間の集中力なんて限られたものだ。仕方がないと思う」「いろいろ違った価値を個人個人が持っているものであり、私語がなくなるような講義をするとは講義のレベルダウンにつながる」

一人の教師に多数の学生、そして教えるべき知識の量は膨大という条件の中で私語は発生せざるを得ない。

(10) 私語への対策

「おしゃべりしている人はいい決まっています。聞こうとしても聞けない。いい迷惑だ。注意するのもバカらしい。先生が一発言った方がよいのでは」「大学に来てまで教師に私語を注意されるのはどうか。大人なのだから、自分から気づいて直すべき」「出席をとらなければ私語は減るだろう」「魅力的な授業をすればよい」「先生は生徒の興味をひくような具体的な話をする」「授業が実益に関係したらマジメに聴く」「講義をよく聞こえるようにする」「先生も雑談などを多くし、気分転換をはかってほしい」「集中時間に限度があるので、少し休み時間をはさんでみる」「クラスの人数を減らす」「1つおきに座る」「立たせる」「LL 教室みたいに机を区切ってイヤホンで聞く」

教師が注意する。学生の自覚、魅力ある授業、休憩時間の導入、席の工夫と対策はいくつか考えられる。

以上の学生の言い分をまとめると、次のようである。

大学生の忙しいスケジュールの中で、友達とのコミュニケーションをはかる場は授業しかない。私語は悪いとわかっているが、必要に迫られているし、ストレスの解消にはなるし、悪を犯す楽しみもある。私語をしなから大事なポイントを押さええているから、先生たちも気にせず、講義を続けて下さい。私語をするより面白い話をしてくれれば、耳を傾けますよ。

2. 私語の社会的考察

松本良夫教授は「いじめ」の生じやすい集団特性として2つあげている。ひとつは、親密でも、逆にそう疎遠でもない「中間」の間柄、もうひとつは、集団の閉鎖性（『いじめ』の社会学的考察）現代のエスプリ『いじめ』No.228、至文堂、昭和61年収録）。

同様に、私語の発生しやすい集団特性について考えてみることもできるであろう。

私語の発生しやすい、授業の集団特性として、強制、平等、匿名、一方的、無目的という5つの条件をあげることができよう。

強制——教師が出席を強制するために、自由意志ではなく、仕方がなく、教室に出てくる学生がいる。不本意で出席した学生から私語が始まる。平等——かつては大学教授に権威があり、教授の前で私語などもつての外であった。教授の権威は失墜し、教師対生徒の関係は平等化し、教授は恐れるに足りぬ存在となった。学生は大学教授の前で安心して私語をする。

匿名——1人対多数の教室で、学生の名前と顔は教師によって認知されていない。学生も、自分の名前も知らない「ソト」の人間である教師に対し、礼儀をつくす必要を感じていない。

一方的——教師が一方的にしゃべるといいうのは不自然な状態であり、黙っている学生にストレスがたまるといえる。そのストレスの解消のために私語をする。

無目的——授業で話を聞くことが、自分の実益（興味の充足、単位の取得）につながらない。

これらの条件（強制、平等、匿名、一方的、無目的）が揃ったところに私語は発生する。私語をなくすためには、これらのいくつかを反対方向に動かさばよい。

出席の強制をやめて、自由にする。

教師の権威を保ち、私語をする学生を厳しく叱責する。

授業を少人数にし、教師対学生関係を親密なものにする。

教師の講義だけでなく、学生の質問、学生同士の討議の時間も大はばに取り入れる。

授業の目的を明確にする。その場で学ばないと後で学ぶことは不可能で、単位もとれなくする。

しかし、以上のような方法をとることは、大学本来の目的と一致しているのだろうか。私語は少なくなるであろうが、失うものも大きい。

出席をとらないと、学生は授業の出でこず大学で何も学ばないことになる。

教師の権威の濫用は、学生にストレスをうみ、自主的学習意欲を抑圧する。

授業の少人数化は、教員の担当コマ数を増やす。

討議時間の導入は、教師の講義内容の量的質的減少を招く。

実利的目的のみでは、真の学習は育たない。

3. 大学教育と私語

大学教育の実際から、私語にかかわりあることを若干述べておこう。

湖木守一教授は、大学とは学生の「野放図な青春のエネルギ―に何らかの統制を加え、彼らの生活を秩序立て、自制心を植えつけ、一人前の大人に磨きあげるところ……労働とかスポーツを通じてではなく、勉強面を通じて、それを統制するところでないければ、大学にはならない」と述べている

(『キャンパスの生態誌』中公新書、1986年)。遊びたがる学生を強制的にでも勉強させる場が大学であり、あふれ出た学生のエネルギーが私語として出現するのは仕方がないであろう。

私語は、大教室の一般教育の授業に多い。しかもそれらは学生とのつながりの薄い非常勤講師が担当する場合が多い。非常勤講師にとって、学生はよその子という意識があり、どうしても自分の子(学生)のようにきびしく叱れない。非常勤に依存する大教室の一般教育の見直しは、私語の減少につながるであろう。

教室の大きさや形態も私語に関係がある。教師の目の届かない大教室の後方、両サイドの学生に私語が多い。教室を小さく、そして横長にすれば、教師の目が隅々まで届き、私語は減るであろう。

教師の声が小さい、声が聞きづらいことから私語が発生することも多い。教師は声楽家のボイストレーニングを受ける。教室のマイク設備を一新するのも一方法であろう。

教壇での教師の自然な動き、そしてパフォーマンスは学生をリラックスさせる。教師は演劇家の演技指導を受けるべきであろう。

教師は、自分の研究成果だけでなく、未完成でも研究のプロセスを学生に提示し、研究の醍醐味を教えることも必要である。それは講義に緊張感を与え、学生の新鮮な反応を引き出す。

いずれにしろ、現在の大学において私語が発生するのは必然であり、私語対策ということではなく、私語を手がかりとして、どういう大学や講義が、大学本来の目的にかなっているのか、検討すべき時であろう。